大西祝の批評主義から見る『哲学雑誌』

納富信留

一　『哲学（会）雑誌』と『哲学研究』の思想史的位置付け

哲学会は東京大学文学部で1884（明治17）年1月26日に創立され、1887（明治20）年2月5日より機関誌『哲学会雑誌』を月刊で発行した。1892（明治25）年6月に『哲学雑誌』に改題し、戦後に年刊に変わって今日まで継続している。京都大学文学部哲学科で設立され京都哲学会が1916（大正5）年4月に創刊した『哲学研究』と共に、学術論文を掲載するアカデミズムの主要メディアとして、日本哲学の発展において基本的な役割を果たしてきた。その意義を比較検討することは、日本における近・現代哲学の発展を検討する上で必須である。

その2誌の意義を考える上では、明治期から様々な思想系雑誌が刊行され、それぞれ役割を果たしていた状況を総合的に検討する必要がある。ここで暫定的に3期に分けて特徴を挙げる。第1期は明治初期で、明六社が発行した機関紙『明六雑誌』が1874（明治7）年4月2日から1875（明治8）年11月14日の停刊まで、月に2～3回で全43号刊行された。また、小崎弘通ら東京青年会がキリスト教の精神で創刊した『六合雑誌』も、1880（明治13）年10月から1921（大正10）年2月まで続いた。[1] これらの雑誌は啓蒙的な目的を掲げ、福沢諭吉らの「学者識分論争」、小崎弘道らの「インスピレーション論争」など、数々の論争を通じて哲学や社会思想を普及させる役割を果

たした。

『哲学会雑誌』はそれに続く第2期の明治後期に位置付けられるが、大学や学会を拠点に、講演会に基づく論考を中心に、海外の議論の紹介する学術的役割を果たした。1897（明治30）年に姉崎正治や大西祝らが設立した丁酉懇話会を母体として1900（明治33）年に発足した丁酉倫理会も、同年5月から『丁酉倫理會倫理講演集』を発行し、1946（昭和21）年519号まで続いた。

京都哲学会が『哲学研究』を創刊した1916（大正5）年4月は第3期の大正期にあたる。哲学会の『哲学雑誌』と意識的に役割を分担しつつ、学術研究の新たな成果発表の場として、より活発な哲学議論を促すものであった。他方で、一般の雑誌も次々に刊行され、広く影響力をもった。1919（大正8）年には改造社が総合雑誌『改造』を創刊し、小説などと並んで社会問題を扱う論考を掲載した。東京大学哲学科出身で岩波書店の創設者である岩波茂雄は、1921（大正10）年に人文科学と社会科学の月刊誌として『思想』を創刊し、今日まで重要な役割を果たしている。また、早稲田大学哲学科出身の佐々木隆彦が社長を務めた理想社も哲学の専門雑誌『理想』を1927（昭和2）年に創刊し、広く哲学の議論に場を提供した。

各時代に哲学者たちがどのような論文をどの媒体に掲載し、それらの間でどのような関係があったかを調査することも今後の課題である。

二　『哲学会雑誌』と大西祝

東京大学文学部哲学科で第10期生（1889（明治22）年卒業）にあたる大西祝は、初期の『哲学会雑誌』に大きな役割を果たした。まずはその関わりを検討しよう。[2]

大西は1864年に岡山で生まれ、同志社で新島襄に学んだ後、東京大学文学部哲学科に入った。学生時代から批

評や論文を書いていたが、文学・芸術・宗教に関する論文は『七一雑報』[3]（「基督復活論」等）、『国民之友』（「批評論」等）、『六合雑誌』（「和歌に宗教なし」「方今思想界の要務」等）、『基督教新聞』、『同志社文学会雑誌』（「英国政党の起源」）などに、哲学論文や哲学史概説は『哲学会雑誌』に掲載している。

文学部学生時代の1887（明治20）年に『哲学会雑誌』が創刊されると、すぐに「池塘学人」の筆名で『六合雑誌』に書評を掲載し、おそらくその年度から雑誌編集に関わった。1888（明治21）年8月に哲学会書記に選出されたとの記事がある。第5号（1887（明治20）年6月5日）より無署名で「西洋哲学小史」で古代ギリシア哲学を紹介し始めたと推定されており、1889（明治22）年11月の33号「懐疑学派」まで17回無署名で「雑録」を連載した。[4]大西が筆名入りで寄稿したのは、1890（明治23）年、第39号の「道徳主義ニ就イテ加藤博士ニ問フ」（138～152頁）が初めてであるが、それまでに三十あまりの「雑録」記事を寄稿していたと推定される。

大西が『哲学会雑誌』編集に本格的に関わる1887（明治20）年6月頃に、雑誌編集方針に変化が見られるという。それまでになかったキリスト教徒の論文が掲載され始め（高橋五郎、小崎弘道ら）、「雑録、雑報」欄が拡充、社会的・啓蒙的内容が重視されていく。[5]大西は同志社時代にすでに『文芸雑誌』を作っており、1895年1月『六合雑誌』の編集委員になるように、雑誌の編集に通じていた。

三　大西祝の『哲学会雑誌』批評

大西が「池塘学人」の筆名で書評「哲学会雑誌を読む」を『六合雑誌』74号に投稿した1887（明治20）年2月28日は、『哲学会雑誌』創刊の2月5日からすぐ後であった。このペンネームの主を立教大学の佐藤善也が1978年の論文で大西であると同定し、[6]平山洋が当時の大西の住所「池ノ端茅町」にちなんだ「池塘＝池の堤＝池ノ端」というペンネームを使ったという根拠を示して佐藤説を補強した。[7]この時、大西は22歳で東京大学文学部の2年次で

あった。事実上のデビュー論文「和歌に宗教なし」を『六合雑誌』に発表する2ヶ月前のことである。

書評では、まず哲学会という学会と『哲学会雑誌』創刊号を紹介する。加藤弘之の祝辞に触れた後、井上円了と三宅雄次郎の哲学論を紹介した。とりわけ三宅が哲学の範囲確定の必要性を説き、「異日必ス此雑誌ニテ大ニ論究シ深ク討尋スル者アラン、諸君其レ之ヲ待テ」（三宅、18頁）としている点に期待を表明する。大西自身はやがて1892（明治25）年11月に『六合雑誌』143号で発表した「哲学問題の範囲」で応答することになる。哲学会については、「此哲学会は我国の哲学研究会の率先なり、此哲学会雑誌は我国の哲学雑誌の先駆なり」と紹介し、注目を促す。また、「我国内に健全なる思想を流通せしめんには健全なる哲学を要すればなり」と述べ、「されば予輩か茲に一二の思考する処を記して哲学会雑誌の注意を仰がんとするも敢て不適当なる事にはあらざるべし」として、日本における哲学の普及のために哲学会と『哲学会雑誌』が果たすべき役割を強調し、応援の態度を示す。

大西が次に展開するのは、「創造の時代」と「批評の時代」という区別とその関係である。文学の歴史における創造の時代には新思想が社会に流通するが、批評の時代は稀なる創造時代の準備をなすものである。この区別は、途中で言及されるようにマシュー・アーノルドの議論に依拠している。[8] まずは当時の文学の状況をこう整理する。「方今我国文学の気運を察するに西洋の新思想を輸入するにのみ汲々として毫も余力なきが如し。今は新思想の種蒔き時にして苅入れの時にあらず。今は批評の時代にして創造の時代は寧ろ未来にありと思はざる可からず」。文学の状況は哲学についても当てはまり、現代は同様に批評の時代にあるという。「当今哲学を学ぶ者は皆舶来の思想をば蓄積する事をのみ力めて自家独得の説をば編み出す事とては毫もなきが如し」。この批評時代という宿命をどう引き受けていくかが、本書評が示唆する方向となる。

ここで大西は、哲学の文体の難解さに話を移す。『哲学会雑誌』発刊という節目に、日本の哲学の現状を反省し、読者に哲学は難解である、「恰も砂を食ふが如し」と感じさせると指摘する。哲学の言葉の難解さに反対すべ

く、ドイツでかつてライプニッツやヴォルフらが、当時学問の共通語であったラテン語を排斥しドイツ語を用いたことを紹介して、同様の転換を促す。具体的には、「今日我国の哲学書中よりも成るべく漢文のかたくるしきをば攘ひ去るべし」とし、『哲学会雑誌』に対して「雑誌の文体は思ひ切りて之を平易明晰にすべし」と提案する。文体の改革には、中国や仏教の古書から難しい用語を求めるのは無用であり、訳語の工夫が必要である。無理に英語の直訳をする必要はない。これらの具体策は、幕末から明治にかけて漢語による難語が増え、意味を理解しないまに流布している状況への痛切な反省が感じられる。また、欧米語からの直訳に依存する傾向への警鐘もある。『哲学会雑誌』という新たな媒体の登場を契機に、日本の哲学のあるべき方向を模索する態度が見て取られる。そうして『哲学会雑誌』の役割として、「適当なる名義を一定して之を世に示さば世間哲学を語る者の便益少々にはあらざるべし」と述べる。

『哲学会雑誌』は批評の職分を負う。それは「思想の是非を判断して其尤も是なるをば広く世上に布くにあり」とあり、コント、スペンサー、ハルトマンら当時流行の思想をも「批評の法庭に立たしむべし」とする。「如何にせば以て尤も善良なる哲学の思想をば広く我国に流布する事を得べきや」が、考えるべき課題である。

他方で、批評の職分を語るのは、今日西洋思想の輸入と論評を専らとする必要があるためであり、「批評のみを以て哲学会雑誌に望む者と思ふ勿れ」とも述べる。思想の輸入のみに追われては、かつて中国思想に圧倒されたように、今後永く西洋思想に圧倒されてしまう。「哲学会の発起者自ら曰く他日一派の新哲学を組成するに至らば独り余輩の栄誉のみならず日本全国の栄誉なりと。夫れ哲学会の記者は此大望を懐く者なり。此大任を負う者なり。請ふ日本国の栄誉の為に奮起せよ」。こうして、大西は創刊された『哲学会雑誌』に新哲学を創造する旗振り役を期待する。

四　東京アリーナの批評主義・批判主義

大西祝らが哲学会と『哲学（会）雑誌』を舞台に論陣を張った明治期は、西洋哲学の導入と普及が最大の課題であったが、それには健全な批判主義が求められた。大西が先駆となったアーノルドの批評criticism導入は、カントの批判Kritik哲学と結びついて「批評主義」という態度を生んだ。大西は自身多くの批評・論争を惹起し、元良勇次郎とは「倫理学は哲学か」、井上哲次郎とは「教育勅語と宗教」をめぐり、加藤弘之とは「天則」について論争し、井上円了「哲学一夕話」や三宅雄二郎「我観小景」を書評することで、これら先輩たちに論戦を挑んだ。「批評主義」は大西に限られる立場ではなく、この時代の東京の哲学者たちに広く共有されていた。そこに学んだ西田幾多郎も徹底的な批評主義から自身の哲学を生み出していった。(9)

この態度は、東京大学文学部哲学科で教鞭をとった桑木厳翼、中島力造、伊藤吉之助、出隆らに色濃く見られる哲学姿勢であり、時に過度の批判が懐疑主義への傾斜を生んだり、独自の思想体系を構築することを妨げたりする負の傾向にもつながった。東京大学を中心にした哲学者たちの活動を、仮に「東京アリーナ」と称すると、それは互いに批判精神を発揮して冷静に判断しつつ、西洋の哲学を正確に理解して咀嚼する営みであったのかもしれない。それは、大西が呼ぶ「批評の時代」であり、来るべき「創造の時代」を準備するものであったかもしれない。出隆による桑木厳翼らへの批評が、そのまま出自身ら東京アリーナの哲学者たちに当てはまるように思われる。

「桑木先生のは、その講義の仕方そのものが先生の批判主義そのものだったとでも言おうか。……先生の批判主義というのは、そうですな、まあ要するに独断論の反対で、それはつまり、はっきりどうだとも断言しないことで、根は不可知論だろうが、自分の説は自分の説で、これをひとに押しつけようとはしない。これが、し

かし、当時の僕にはききめがあった。真理だの、絶対者だの、そう簡単につかめるもんじゃない、自分の説なんておいそれとたてられるもんじゃない、昔からいろいろの学説があるんだから、それをまず知っておけ、大学生はそれらをまず勉強するこった、というのが先生から僕の教わったもので、あやふやと言えばあやふやなこうした態度が、比較的無抵抗にあの昔の「哲学青年」に受け容れられたのは、年の加減でもあろうが、ひとつには、さきにも言ったように、松本先生の講義などから影響されていたからでもあろう。……

とにかく、こうした桑木さんの傾向が、僕にかぎらず、一般に、その後しばらく東大哲学科の学風を京大の西田哲学とか田辺哲学とかいうのがドグマ的になり、本尊さまができて、その周囲に信徒が集まるが、東京ではめいめい勝手で、体系のできないどんぐりのせいくらべで、よく言えば考証的・批判的だが、悪く言えば洋と区別したとでもいうか、或いは京大とのちがいを象徴しているとでも言おうか、とにかく京都では、次第に品の小間物店みたいで、……」（『出隆自伝』「第4夜　東大哲学科の諸先生」80頁）

注

（1）『「六合雑誌」の研究、「六合雑誌」総目次』、同志社大学人文科学研究所研究叢書、教文館、1984年参照。
（2）平山洋『大西祝とその時代』、日本図書センター、1989年、98-108頁に詳細な検討がある。
（3）『七一雑報』は、日本における最初の週刊キリスト教ジャーナル、神戸・雑報社刊。
（4）平山洋の推定。「大西祝全集未収録論文目録」267-269頁参照。
（5）大西の加入による変化については、平山、101頁参照。
（6）佐藤善也『透谷、操山とマシュー・アーノルド』、近代文芸社、1997年所収参照。
（7）平山、99-100頁参照。
（8）佐藤、88-96頁参照

（9）　板橋勇仁『西田哲学の論理と方法 ―徹底的批評主義とは何か』、法政大学出版局、2004年は、西田の哲学の方法として「徹底的批評主義」に焦点を当てている。ただし、大西との関係やその背景には触れていない。

（筆者　のうとみ・のぶる　東京大学大学院人文社会系研究科教授／西洋古代哲学）